加藤定彦先生を送る

沖森　卓也

私が立教大学文学部に赴任したのは一九八五年四月のことで、この時、加藤定彦さんは一般教育部に所属されていた。文学部日本文学科所属と一般教育部人文・社会学科の日本文学担当との専任教員が隔週に開く合同の会議は、合わせて十一名が集まるという壮観なものであった。赴任した当初、日本文学科には、松崎仁・小田切進・井上宗雄・前田愛などの泰斗がおられ、私自身どのように接してよいか、随分とまどったものであった。そのメンバーの中で、最も年齢が近かったのが加藤定彦さんであった。立教大学に専任講師として勤められることになったのが一九七七年四月であるから、すでに落ち着かれた感じで、私には頼りがいがある方のように思われた。

私の祖父直三郎は古書肆を営んでおり、松尾芭蕉の生地である伊賀という土地柄、俳諧関係の資料を扱うことが多かった。俳諧が御専門である加藤さんは、その関係で伊賀まで私の祖父を尋ねて来られたことがあり、私よりも先に祖父がお会いしていた。そして、私が立教大学に勤めることになったことを話すと、すぐに加藤定彦さんのお名前が出てきた。祖父もまじめなお人柄に好印象を持っていたようで、いずれお会いする時を楽しみにしていた。立教大学に勤務するようになった当初、加藤さんが羨ましく思われたことがある。それは、六号館の研究室は四人が一室を使っていたのに対して、旧十二号館の人文研究室はその五倍ほどの広さがあったであろうか、そこを三人でお使いになっていたからである。レトロな、いかにも大学の研究室という雰囲気で、何よりも本棚に専門書が並んでいる光景が好ましく思われたものであった。

その歩き方は独特で、我が道を行くというような何か一途なところが私には感じられる。このことは入学試験問題の作成・校正などの時に遺憾なく発揮された。一九九五年に文学部に移籍され、一般教育部が解消された後も、一般教育部がそれまで担っていた基礎教育と学生選抜に関しては特にこだわりを持たれていた。それは一般教育部に所属したという原点を大切にし、その気概を持ち続けられたことにあったのであろう。最後まで気を抜

かず辛抱強く物事に対処される姿勢には今でも頭が下がる思いである。ある時六号館の研究室に行くと、研究休暇中の加藤さんがご自分の研究室から出て来られた。休暇中であまりお見かけすることがなかったものだから、その理由を尋ねると、俳文学会の事務局を引き受けているという。お一人で学会事務を切り盛りされているようであった。俳諧研究の大家と言っても過言ではないにもかかわらず、研究組織運営のためにも尽力されていることにも大きな感銘を受けた。

身体には人一倍気を付けておられたことも印象深い。飲む酒といえば、決まって焼酎のお湯割りであった。冷たい飲み物をお飲みになる姿を私は見たことがない。そして、飲み過ぎるということもかつてなく、飲むにせよ食べるにせよ、いつも控えめでおられた。白いマスクをかけているようすもよく拝見したし、日頃からの摂生ぶりはとても私には真似ができない。定年退職を機に住まいも故郷の方に移され、研究生活を再出発されるにあたり、恙ないことを心から願わずにはいられない。その後、同姓の専任教員が学科内に赴任されたので、それ以来「定（さだ）さん」と呼ばせていただくこととなった。「定さん、今後のますますの御加餐をお祈り申し上げますとともに、後生のためにより一層のご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。」